
ほしのたまご。

佐倉翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほしのたまご。

【Nコード】

N8785W

【作者名】

佐倉翠

【あらすじ】

テスト投稿。16歳の少女・なつみの物語。文章は情景描写や周りの描写はほとんどなく、心の声や会話で構成されています。文字数が非常に少ないです…。いろんな意味で軽めの物語になっています。

プロローグ。

くはじめに

はじめまして、佐倉翠さくらみどりです。

この物語はテスト投稿ですので、理解しにくい・読みにくいところがあると思います。

詩のような形式で投稿していくつもりです。

よろしければ読んでやって下さい。m () m () m

くプロローグ

『ねえ、ほしのたまじってしってるっ。』

『なあに、それ？』

『あのね、ねがいがかんうんだって』

ほしのたまごはね、どこか遠い国にあって

王子様が持つてるんだって

王子様がほしのたまごを放つとね、

鳥みたいにはたばた飛んで

いちばん願うきもちがつよいひとのところへ飛んでいくんだって

そしたらね

たった一瞬だけ

ねがいをかなえてくれるの

とおいむかし

あなたがしてくれはなし。

春。

「1年生…だよね？」

高1の、春。

校庭の、さくらのした。

「3年の、大江ケイです。よろしくね」

手をさしだす。

それが、あなたとの出会いだった。

「僕はね、中3まで県外に住んでたんだ。

そこに君そっくりの女の子がいてね・・・」

「うちのクラスに佐々木ってやつがいてね、

シチューのにんじんは食べるのに、カレーのにんじんは食べないんだ。

変なやつでしょ?」

あなたのやさしいひとみがすきで

あなたのはなし、ずっと聞いていたくなって思ったの。

むかした町のじと、

クラスのはなし、

科学のはなし、

みらいのはなし、

遠い国のおとぎ話。

あなたという時間が楽しくて、

ずっと、あなたの笑顔を見ていたくなって、思ったの。

ハッコイ。

あたしのハッコイはね、

小学生のときだったの。

隣の席の子でね、

なまえは・・・

へー。

恋、かあ・・・。

小説やトレンドイードラマじゃよく聞くけどなあ・・・。

きつと、素敵なんだろうね。

もしかして、なつみ、恋、したことないの？高1にもなって？

うん。

うそだぁ・・・。

あ、でも、ケイセンパイと仲いいよね？

うーん。

いつも一緒にいてくれるし、話おもしろいし、やせしるし、

お兄ちゃんみたいだよ。

お・・・お兄ちゃん？

うんっ。

とか言っつて、ほんとは好きなんじゃないのー？

うーん・・・。

でも恋と違って感覚わかんないし、

恋したらわかるもんなの？

あたしが初めて恋したって気づいたのは

好きな子が、風邪で休んだときのの。

いなくて、寂しくて

それで初めて恋したって気づいたなあ・・・。

でも、いなくて寂しい人なんていっぱいいるよ？

その人のことでいっぱいになるんだよ。

あんた友達が休んでも、明日になったら元気になるよって思って

一日心配でどうしようもなくなるなんてこと、ないでしょ？

いなくて、寂しくて

その人のことではいっぱいになったら

恋したってことなんじゃないかな？

ふーん……。

そういうもんかねえ……。

夏。

「あの子、ケイセンパイのことすきなんだって」

「へー、そうなんだ」

「あれ、なんとも思わない？」

「どうして？」

「センパイのことは、ほんとうにお兄ちゃんなんだね？」

「うん、たぶんね」

「ケイクんっ」

あ、あの子……。

「ノート、先生のところを持って行くの？手伝おっか？」

「ありがとう」

かわいいひと・・・。

「ケイクんっ」

「ケイクん」

「ケイクーんっ」

センパイの、えがお・・・。

センパイは、あの人のこと、どう思ってるのかな・・・？

「なつみ？」

「え？」

「どづしたの、さっきからボーツとして」

「え、ボーツとしてた？」

「うん」

「あ、そうなんだ。気づかなかった。ごめんね」

「いよいよセンパイのことが気になってきたかー？」

「そんなんじゃないよ。あたしとあの人は、ただのセンパイとコウハイだもん」

「そうだよ。」

あたしとあの人は、ただのセンパイとコウハイ。

センパイが誰を好きでも、カンケイなくて

「ねえ、あの子」

センパイに、告白したんだって!!」

「あんな子に告白されたら、

誰だってOKしちゃっよねー、

かわいいもん」

・・・カンケイ・・・

・・・なくて・・・

きもち。

「なつみ、最近センパイと一緒にいないね」

「そんなこと、ないよ」

「でも、前より一緒にいること減ったんじゃない？」

「そんなことないって」

「センパイのこと、好きなんじゃないの？」

「すきだよ。」

「とつても、だいすき」

「そういつことじゃなくてさあ」

「………?」

「だからさあ、トモダチとか、センパイとか、そういうことじゃなくさあ……」

もつそろそろ

きづいてるんだと思ってた」

「あ、あたし、こっちだから

バイバイ」

「なつみ……」

『あんな子に告白されたら

誰だってOKしちゃっよな—

かわいいもん』

『トモダチとか

センパイとか

そついでことじゃなくてさあ・・・』

しらないもん。

あたしは、しらないんだよ。

そついで感覚とか、

なつたことがなくて・・・。

すきだよ。

だいすきだけど

お兄ちゃんみたいな・・・。

秋。

ウェイトレスが、レモンティーのカップを、コトン、と音を立てて置く。

「どうして、してるの?」

あなたがいう。

「友達が、言ったの」

あなたは笑う。

「たしかにあの子はかわいいけどね」

なんか、ちがうんだ」

「じゃあ、告白、ことわっちゃったんですか?」

「うん」

なんでだろうね、

しぜんとよかったって、おもっちゃったの。

「ねえ、あした　10月16日、誕生日だったよね？」

「おぼえててくれたんですか？」

「うん。だけど明日、ちょっと用事で学校に来れなくなっちゃったんだ

だから、今日「

「わあ、かわいいっ」

青いペンギンの、ストラップ。

「こんなものでいいのか、よくわからないけど・・・」

「いえいえ、すごくうれしいですっ」

正直、よく見るとかわいいとはいえなかった。

だけど、うれしいのはうそじゃなかった。

ふつうだったら、センス悪いって、わらわれそう。

でもいいの。

だって

ふつうじゃないもの

あなたがくれるものは。

ふっと、そんなことばが

胸をよぎった。

「なにこらじや。

青いペンギンの、ストラップ

うねし〜く〜て、うねし〜く〜て

きつと、ずっとたからもの

「なんかいいことあった？」

「え、べつに？」

「あやし〜い」

「けっきょく、センパイはあの子の告白のことわってたんだもんねー」

「そっかー。そういっことか」

「ちがっつよ。」

だからうれしいんじゃないよ……」

嘘。

ちよつとうれしかつたかも……

なんて、やっぱりいえなくて

「クリスマスはどうするの？」

「へ？」

「そっか、もう一ヶ月後だもんねー！」

「ま、まだ決まってるないよ；

まだ、一ヶ月あるでしょ？」

「そんなこと言って、あなた

クリスマスになってきた瞬間

顔赤くなってたよ？」

冬。

街頭のサンタは微笑みながら

けなげにティッシュを配ってる。

あのサンタも、今日付けで終わりだろう。

せつないなあ・・・。

結局、あの人から

クリスマスの話は、

ひとこともきかなかった。

ノートを鞆にしまって

校門を出る。

いつもの通り。

幼いころ、連れて行ってもらったゲームセンター。

なつかしいな。

UFOキャッチャーのいぬのぬいぐるみがほしくて

泣きわめいてたっけ。

なぜかおもてにおいてある、UFOキャッチャー。

そつとのぞいてみる。

あのぬいぐるみは、もういない。

「あれ、なにしてるの?」

!

センパイ……！

「あ、あの……」

「UFOキャッチャー」

「へ？」

「すきなの？」

「あ……、いえ、そういうわけじゃ……」

「かわいいね、ぬいぐるみ」

えがお。

かおが、あつくなる。

「一回だけ、やってみようかな」

え？

チャリン。

ウィーン。

ガチャン。

「あっ」

ポトリ。

くまの、ぬいぐるみ。

「センパイ、上手ですね！」

「たまたまだよ。ハイ」

目の前に突き出された、ぬいぐるみ。

「いいんですか？」

「うん。男が持っても、しょうがないしね。ね、一緒に帰ろうか」

「え・・・あ・・・ハイっ」

きつと、センパイはクリスマスだからとか

そんなことは気にしてない。

でもね、その一言一言が

あたしにとっては

。トントンと、のびのびと。

新年。

初詣、誰と行ったの？

お姉ちゃんだよ。

え、センパイじゃないの？

さ、さそえないよ…。

それに、センパイは受験が忙しいんだもん。

あたしになんか、かまってられないよ。

センパイは、県外志望なんだって。

でもさ、卒業までにメアドくらい聞いておいたら？

卒業したら、

もう、会えなくなっちゃうよ。

考えなかった

センパイが、いなくなることに

しってたはずなのに

いま、わかった気がしたの

どうして・・・？

じゃましちゃだめだよ

お医者さんになること

センパイの夢だから

あたしは・・・

どうして・・・？

このまま連絡も取れなくなるかもしれないって考えたら

胸がぎゅゅってなってきた

ちがうの

きっと、センパイのことはお兄ちゃんなのに・・・

なのに・・・

卒業したら、もう会えなくなる・・・？

そんなの、やだ・・・

ゆるる。

3年生は、もういない。

この時期になると、3年生は

自由登校になる。

結局、メアド聞かなかったの？

うん

じゃあさ、2月14日に、チョコ渡しに行っちゃえば？家まで

そしたらさ、ついでにメアドきいちゃいなよ

そんな勇気、ないよ

センパイは、あたしのこと、何とも思っていないんだもん

はずかしいよ

じゃあさ、どうするの？

卒業式に、きくの？

もういいかげんにしてよ！

あたしはセンパイのことなんとも思っていないし、

センパイだってあたしのことなんとも思っていない！

チヨコ渡す仲じゃないし、

センパイに、迷惑だよ！

.....。

わかった。

「めん……」。

あやまれればいいのに

あやまれなかった

「あいつ、どうしたの？」

お姉ちゃんの声。

「なあ。帰ってきてから、ずっと部屋に閉じこめてるよ」

お母さんの声。

涙で濡れる枕。

あたしは、センパイのこと、なんとも思っていないのかな？

わかんないよ

恋って何？

センパイのことはすき。

でも…これって、恋？

友達として？

お兄ちゃんみたい？

わかんない。

わかんないよ…

卒業。

あなたの名前

読み上げたとき、センセイは泣いていた。

校長と会長は、つまらない話をして

教頭は、祝辞を読み上げる。

蛍の光

仰げば尊し

あたしが仰ぐは3月のそら。

さくらは春を匂わせて

それでも風は冬のまま。

あなたと出会った、さくらのした。

ねえ、ほしのたまごってしってる？

なあに、それ？

あのね、願いがかなうんだって

ほしのたまごはね、どこか遠い国にあって

王子様が持つてるんだって

王子様がほしのたまごを放つとね、

鳥みたいにはたばた飛んで

いちばん願うきもちがつよいひとのところへ飛んでいくんだって

そしたらね

たった一瞬だけ

ねがいをかなえてくれるの

ねえ、会えなくなるわけじゃないよ

きっと、また、会えるから

願ったら、きっとね

ほしのたまごがかなえてくれるんだ

だから、そんななお、しないで

あなたがそういうから

わらっていきよって、おもえたの

・・・はい。

センパイ、いままで

本当にお世話になりました。

高2。

「いってきませーす」

「携帯、わすれてるよ!」

「じゅめん、ありがとう・・・」

・・・あ・・・

ペンギンの、ストラップ・・・

ねえ、あなたは、いま

どうしていますか？

高2になって

数ヶ月が、過ぎました。

「ほら、いつまでそこにいるの！」

遅刻するよ！」

「あ、うん！」

いってきまーす！」

・・・

K大学に進んだって聞いたけど

がんばっていますか？

すいすいですよー！

K大学って、たしか、附属病院はしっかりした設備と最先端技術のある病院だって・・・

センパイから、きいたんですよ・・・

あ、あたしは、がんばっていますよ。

初夏と呼べる頃もとつに過ぎ

毎日、暑い日が続いています。

あなたのところは

どうですか？

今年の今頃は、あの子があなたに告白して

なんて、噂がとびかかっていましたね（笑）

結局、あなたへの気持ちはなんだったのでしょうか？

今となつては、わかりません。

でも、あなたと会わなくなつて

話さなくなつて

ひとつだけ、わかつたことがあるのです。

恋とか、

友達とか、

よくわからないけれど

あなたは、あたしにとって・・・

ブルルルル

「あ、電話とつてー」

「うん」

あなたは・・・

あ、広瀬さんのお宅ですか？

ケイの、母です。

「センパイの・・・」

あなた、なつみさん？

「あ、はい」

ケイから、よく話を聞いていました。

「あの・・・？」

あのね
・・・

あなたは、

あたしにとって

知らせ。

あのね、いま・・・

ケイが、亡くなったの・・・

・・・

どういじことですか・・・

昨夜、ケイの容態が急変して・・・

容態ってなんですか・・・？

・・・

もしかして、きいてないの・・・？

え・・・？

ケイはね、生まれつき心臓に疾患があつて

毎月、16日に検診を受けていたのよ

16日・・・

あたしの誕生日・・・

昨年の診断が芳しくなくて

高校卒業してから、入院して、治療に専念していたの

・・・あの・・・

どこの病院に、入院していらつしゃったんですか・・・

K大学附属病院よ

K大学・・・

センパイ、

あなたは・・・

すべて、

しっていたのですね・・・

向こう側。

そう、ずっと黙ってたのね…。

電話の向こうで、そう呟いた。

すすり泣く声が聞こえたわけじゃない。

嗚咽が聞こえたわけじゃない。

だけど、電話の向こうで泣いているのが

はっきりとわかった。

大江さん、あたし…。

そう言ったつきり、出てこない。

何を言いたいんだろう。

何を言えるんだろう。

こうして、久しぶりにあなたの家に足を運んでも

見つからない。

ううん、ほんとは

大江さんに言いたい言葉なんてない。

あるのは

“あなた”への言葉。

黒い群が

列をなす。

そのさきにあるのが、

あなたの笑顔だなんて

信じられない。

ねえ、どうして・・・？

どうして、おしえてくれなかったの・・・？

いなくなっちゃうの、しってたんでしょ・・・？

ずるいよ、あたしだけサイゴをしらなかったなんて・・・

わかってるよ・・・

しんぱい、かけなくなかったんだよね・・・？

あなた、やさしいもの・・・

でもね、しってほしい

いきなりいなくなれると

さみしいんだよ・・・

一ヶ月後。

あおいそら。

白の絵の具をぶちまけて

今日もやさしい風が吹く。

あれから

一ヶ月ですね。

心にポツカリ穴が空いたようって

こんなかんじかな？

あたしのこころは

穴が空いたんじゃないって

どこかに、とんでっちゃったようです。

たぶん、あなたのところにあるのでしょぅ。

あたしの前にはいま、

ふわふわのこころの抜け殻があります。

それでも、この目は

あの鮮やかな青をとらえ

肌は、

たしかに吹く風を感じています。

どういふことなのでしょう？

からっぽになったら

必ずしも、色褪せてゆくわけではないようです。

.....。

ねえ

きこえていますか？

いま、あいたくて

むねが、ぎゅうってなるんだ.....。

願い。

ほしが、キラキラ光るの。

ほら、またきらんて。

窓を開けて

あなたも、このほしぞらみてるかなあ？

あ、ながれぼし。

だれかのねがいがかなのかなあ？

紺のふるしきに

いっぱいにちりばめたちいさな宝石。

ねえ、もしもあたしがねがったら

ねがいをかなえてくれますか？

ひとみをとじて

ひがしのそらに、またひとつ

しろいひかりがながれたことは

だれもしらない

「じつはそうなんだ」

部屋に、鞆を取りに行く。

携帯をポケットに、鞆をつかんで

「………いってききます」

机の上の、くまのぬいぐるみ。

あなたのくれた・・・

「ん？」

くまのぬいぐるみのかげに、なにかある。

だえん形のえんばん状で

ちょっとだけふっくらしてて

羽根が生えていた。

なんでかな。

なんとなく、なつかしいようなきがして

わすれてたなにかを、とりもどせるきがして

手にとつたら

ふわってからだか

ういたようなきがして

めのまえが、ひかりにつつまれたの・・・

猫目の少女。

どこを見渡しても

木・木・木。

こじは・・・

「あなた、だれ・・・？」

振り向けば、猫目の女の子。

「こじは、どじ・・・？」

女の子に問うと、

「そっか、迷い込んだのね」

女の子に手を引かれて

出たのは神社の裏。

「どこから来たの？」

女の子は問う。

「わからないの」

女の子は笑う。

「じゃあ、うち来なよ」

また、女の子に手を引かれて

町へとかけだす。

見知らぬ町へ。

だけど、どうしてだろう。

鳥居に記した、神社の名前

知っている気がしたの・・・。

過去。

「・・・ゆい、その子誰？」

「ともだち」

「どーみても高校生だけど。」

制服も見慣れないし、どつという友達なの？」

「お姉ちゃんには関係ないでしょ。」

あ、この子しばらくうちに泊まるから。」

お姉ちゃん服貸してあげてね」

「はあ？」

「あ、ねえ、あたしの部屋行こっ」

言われるがまま、女の子の部屋へ連れていかれる。

「あなた、名前は？」

「……なつみ」

「あたしはゆい。中1だよ。」

「よろしくね」

「よ……よろしく」

ふっと、壁に掛けられたカレンダーが目に入った。

「……カレンダー、4年前のままなのね。替えないの？」

猫目の女の子は、きよとんとした顔になる。

「何言ってるの？あれ、今年のやつよ」

え？

携帯画面を見る。

本当だったら今日は平日。

あのカレンダーの通りなら、今日は休日。

携帯画面は、平日を示していた。

よかった。

でも・・・

やっぱり、違和感がある。

リビングの日めくりカレンダーも・・・

ニュースも・・・

すべて、

4年前を示している。

あの、ひかりだ。

ひかりと、

だえん形でえんばん状の

物体。

こうして、あたしは

過去に来た。

遠い町。

そしてあたしは、悟っていた。

「このアクセサリー、

かわいいでしょ?」

「この公園、遊具が全部動物をモチーフにされてるでしょ。

だから、動物公園って呼ばれてるのよ」

「植野屋さんっていう駄菓子屋さんがあったね、

地元ではとっても親しまれているのよ」

しってる。

しってるよ、ぜんぶ。

とても、なつかしいの。

ここは、あなたが話してくれた

あなたが

むかしいた町。

「c a p eっていうお店があるんだけど

ちょっと行ってみない？

パフェがおいしいのよ」

あたしはこれから、どうしたらいいのだろうか。

無邪気にはしゃぐ女の子。

『どこから来たの？』

そう聞かれたのを、思い出す。

どこから来たのか

伝えるべきなのだろうか……。

café。

窓側の、奥。

通りが見える場所。

パチン、パチン

携帯を、もてあそぶ。

パチン、パチン

「ねえ、携帯かわいいね。

ちょっとみせて」

「え・・・あ、うん・・・」

パチン

「……………」

これ、おかしくない……？」

「え……？」

「だって、ほら。」

どうして、曜日がちがうの？

直した方がいいんじゃないの？」

「それは……………」

ねえ、

もし……

もし、あたし、未来から来たの、なんて言ったら

引く……?」

「え……?」

あたしの顔と、携帯画面を交互に見る。

「ほんとに……?」

じゃ、じゃあ、これから何が起きるかわかるの!??」

「え……っ」

「なんでもいいから、これから起きること、言ってみてよ!」

「きゅ……急にいわれても、わかんないよ……。」

4年前でしょ……えーと……」

「　　やっぱり、いいわ。」

最初から、ちよつと思つてたの。

あなた、不思議な人だなつて」

たいせいなひよ。

「しんじつて、くねるの……?」

「うんっ！」

あたし、もともとそういつのだいすきだし

しんじたほづが、おもしろいじゃない」

「……そ……そういつと……?」

「ねえ、このペンギンのストラップ

彼氏からもらったの?」

「え……っ」

ち……ちがっや……っ。

でも・・・

すぐ、たいせつなひと・・・

「たいせつなひとって・・・」

「恋してるんじゃないのとか、言われたことあるけど

でもね、あたしにとってあのひとは

恋とか

友達とか

そういうことじゃなくて

ただひたすらに、たいせつなの・・・」

「・・・」

「でも……」

なにもいわずに、いなくなっちゃった……」

「いなくなつた？」

「死んじゃつたの、一ヶ月前に……病気で……」

「……。。」

何もいわなかつたのは……

心配、かけたくなかつたんだよ、きつと……」

「……わかつてる。

わかつてるよ。

ぜんぶ、やさしさなんだよね。

でもね、なんにもいわずにいなくなられちゃうこと

すごく、さみしいよ……。

なんにも、つたえられなかったもの……

ありがとうも……

ごめんなさいも……

さよならも……

とまらない

雲

頬を伝って

なんでかな

あいだ。

あいだ………

「で……っ、でもっ!!」

あたし、4年前のセンパイを知らない……

どこにいるのかも……」

「ほんとうに、わからないの?」

「……」

「あなたの町に、いるんじゃないの?」

「………。」

いぢ………

この町に、いると思う……」

「この町に？」

「センパイ、中学卒業と同時に引っ越したの。」

高校も、あたしの町の高校を受けて

それまでは、この町にいたの」

「じゃあ、すぐ見つかるかもしれないね。」

そのセンパイ、なまえは？」

「大江……ケイ……」

「……うちの中学にはいないな、たぶん……。」

他の中学の子に聞いてみるよ」

「……………」

ありがとう……………」。

ほんとうに、ありがとう……………」

あなたをさがして。

大江ケイ？

知らないな、そんなひと。

中学3年生？

学年が違つと、ちょっとわかんないな・・・。

部活とか、わかる？

心臓病？

ごめん、やっぱりわかんないや・・・。

ああ、そうだ。

あたしの友達、3年生にお兄ちゃんがいるの。

きいてみるね。

しゅん。

やっぱり、その子のお兄ちゃんも知らないって。

ゆいのたのみだから、協力したいけど

ごめんね。

ゆい、ゆい!!!

友達のお兄ちゃんが、他校の子にも聞いてくれたの!!!

でね、

H中学校の

3年生なんだって！！

だけどね、いまは

体調が悪くて

入院中なんだって

面会は

できないんだって。
。

決意。

季節は、

めぐる。

風は、

肌寒い季節をつれて。

悪化
？

はい。ケイくんの病気は、思ったより進行しています。

転院を、おすすめします。

.....。

あの子に・・・

高校へ、通わせてあげたいんです・・・。

実は、もうすぐにも紹介状は書けるんです。

県外なんですけどね、

ケイくんを紹介したい病院の近くに、S高校という高校があります。

この高校は、過去に重病の患者さんを受け入れたことがあります。

ケイくんのご家族のみなさんさえよろしければ、私が問い合わせ
せてみましょう。

・・・。

。

わかんないよ。

そんなこと言われたって 。

顔馴染みの友達 。

たしかにそんなに思い入れのある友達なんて、いない 。

ほとんど通うことのなかった、中学校。

もし、また学校生活を送れるなら ？

少しは、いい思い出を残せるだろうか ……。

わかったよ。

その高校、

受けてみるよ。

さくらのした。

3月。

校庭のさくらのしたに

佇む、少年。

15歳の、あなた。

「きみは・・・だれ・・・？」

あたし・・・あたしは・・・。

あたしのことなんか、知らないよね・・・。

「・・・？」

あのね、意味わからないかもしれないけど・・・

ありがとうね。

「……………」

あなたのことは、ずっと知ってたの、2年くらい前から。

やさしくて、お話がおもしろくて……、

いっつも、元気もらってたんだ！

「ぼくは、そんなこと……」

いきなり、ごめんね。

でも、ほんとうにありがとう。

「……………ぼくが、あした引越すから、来てくれたの？」

……………

ないしょ。

でも、さよなら。

「……ねえ」

……？

「なんか、きみとは、またあいたいな」

え……っ

「ほしのたまごに、おねがいしてみようかな」

ほしのたまご？

あ………

また、からだが……

ふわっとうついて・・・

めのまえが、ひかりに

あなたが・・・

みえなくなる・・・。

ほしのたまご。

白い、天井。

ピンクのカーテンと、

見なれた机。

時刻は、7時50分。

ここは・・・

あたしの部屋　　・・・。

「なつみー、何してんの！遅刻するよー！」

場所は、ベッドのうえ。

携帯画面は、あの朝の日付のまま・・・。

だえん形でえんばん状の、羽根の生えた、あの物体もない。

すべて

夢
？

「なつみー？」

「あつ、はい！」

携帯をポケットに入れて、鞆をつかんで・・・

あたし、寝ていたの・・・？

あれだけの月日の夢を

一瞬で、見ていたの？

とっっても不思議な夢・・・。

「これを に代入して
」

窓の、外。

風が、ながれる。

なにも、かわってない。

季節も

空も

あなたが

いないってことも。

いまになって、不思議に思う。

センパイは、どうしてあたしに話しかけたんだろう？

『僕はね、中3まで県外に住んでたんだ。』

そこに君そっくりの女の子がいてね・・・』

もしかして？

ううん、あれは、夢だったんだもの。

きっと、偶然だよ。

・・・それとも・・・

『願ったら、きっとね』

ほしのたまごがかなえてくれるんだ』

ほしのたまごが、かなえてくれたのかな？

「なつみー、いつしょにかえろー」

「うんっ」

あえたのは、夢の中だけ

こんなかたちで、願いが叶うのも

悪くないかもしれないね

エピソード。

「いってきます」

机の上のくまのぬいぐるみに、そう言っ

部屋を出る。

ペンギンのストラップも

あいかわらず、携帯電話につけたまま。

あれから、月日は流れ

あたしは高校を卒業して

県外の大学に進学しました。

一人暮らしの準備は大変だったし

入学式も、知り合いがいなくて不安だったけど

ほしのたまごが、たった一瞬だけ

願いを叶えてくれたから

こんどは、あたしの力でがんばります!!

センパイ、みてくれていますか？

あ、今日は、初講義なんです！

やっぱりまわりに友達がいなくて不安だけど

だれか、話しかけてくれないかなー、なんて……

自分で話しかけなくちゃ、いけませんね……。。

「あの、隣、いいですか？」

え・・・っ

あ、どござ、あたし・・・っ

あ・・・。

瞳

面影

なつかしい、

声。

めのまえにいる

女の子。

f i n .

女の子。

猫目の

いつかの

「あなたは・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8785w/>

ほしのたまご。

2011年10月1日03時44分発行